

『叔母との旅』

—静から動へ—

植木 利彦

倉敷芸術科学大学生命科学部

(2006年10月4日 受理)

はじめに

1969年、グリーンは、『喜劇役者』(*The Comedians*)以来3年ぶりに『叔母との旅』¹⁾ (*Travels with my Aunt*)を出版した。当時彼は65才であった。彼は、『逃走の方法』(*The Way of Escape*)のなかで『叔母との旅』は、楽しみのために書いた唯一の小説である。主題は老年と死であり——六十五歳で取り組むにはまさに格好な主題といえる²⁾と述べている。そしてこの小説の主たる目的は、父親がいかなる人物であったか、真の母親は誰であるのかの探求の結果としてヘンリー自身の自己発見であると言える。

ヘンリーの世界は叔母に出会う前の世界と出会った後に彼が知った世界の二つに分けられるが、前者は彼が義母とともに銀行を退職するまで暮らしてきたサウスウッドの町とキーン嬢によって象徴される静かな生活である。後者はオーガスタ叔母と彼女と関係のあった多くの人々によって象徴される波瀾に富んだ生活と考えられる。

この小論ではヘンリーがこの二つの世界の聞き合いのなかで次第に叔母の世界に魅了されていった過程を分析し、グリーン的人生に対する姿勢を解き明かしてみたい。

静の世界

ヘンリー・プリングは、若いころから毎日通った銀行での生活、在職中に職業によって調整された控えめな性質が身に付いた男である。銀行が生きがいであり、銀行は彼に気まぐれを警戒することを教えてくれた。「気まぐれはしばしば破産に終わることがあるからだ」。³⁾ 銀行で人生の大半を終えたヘンリーは実直、勤勉、誠実をモットーとする典型的な小市民である。そして50歳を超えて地方の銀行の支店長を早期退職し、ダリアを育てることだけが生きがいの静かな老後の生活を送っている。それゆえ母親の葬儀でも大きな生活の変化であり、心が躍るような大事件といえるのである。他人から見れば、悠々自適の年金生活を送っている独身のヘンリーの生活は、一見、羨ましいような落ち着いた生活である。彼のそうした安定した変化のない世界は彼の住むサウスウッドの町——生け垣に囲まれ芝生が敷き詰められた個人住宅——に住む人々によって如実に示されているようだ。例えば、隣のチャージ少佐も年金生活者らしく毎日金魚に一定量の餌を与えるだけの優雅な生活を送っている。そして以前ヘンリーが勤めていた銀行のお得意様でもあったア

ルフレッド・キーン卿の娘のキーン嬢は父親とヘンリーの雑談に耳を傾けながら、昔ながらのタッチング編みをして静かな夜を過ごす。そして“he (Henry) knows that what she (Miss Keene) represents is a resumption of the dull life of Southwood.”⁴⁾ 毎年クリスマスを迎える度に同じレストランで同じ料理を注文し、同じ人々と顔を合わす世界。気になるのは曇り空の下に出しっぱなしにした草刈り機が、雨が降り出したら、雨に濡れて錆はしないかという取るに足らないことだけである。

言うならば、サウスウッドの町は伝統と慣習に裏打ちされた社会の規律をしっかりと守り、年老いた者から順次亡くなっていくと予測できる世界。生活を乱すようなことは何事も起こらない安定した世界である。この世界をヘンリーは次のように述べている。「これはわたしの住み慣れた世界だ——キーン嬢が戻りたがっている年配の人たちの小さな地方的な世界だった。そこでは危機感といってもただ新聞の記事で読むしかなく、未来の大変動といっても政府が変わることだったり、最大のニュースといっても、アールズ・コートのグレーハウンド競走場の賭けで途方もない大金を失った、わたしの記憶にある欠陥書記のことくらいだ」(p.178) 即ち、彼は銀行での生活とほとんど変わらないこの安全な生活を何よりも大切なものと信じているのである。そして“Henry has prided himself on belonging to the respectable class of society.”⁵⁾ そこは昨日と同じことが今日も繰り返され、今日と同じことが明日も繰り返される世界なのである。“A man-child, made redundant by his banking employers, content in his bachelor rut while growing dahlias and tentatively courting a spinster,”⁶⁾ すべての事柄が毎日同じように繰り返されるだけで印象に残るようなことは何も起こらない。だから時間つぶしにお隣のチャージ少佐に誘われてこの町の政治的な集会に出席したとき、その場には銀行に勤めていた頃のお得意さんが数人いたが、彼らはヘンリーを見ても思い出せなくて、怪訝な顔をしている。また、クリスマスの日、彼はクリスマスの特別な食事をするために近くのレストランに行くが、そこで出会った提督は彼のことすら覚えていない様子である。彼はそのときの気持ちを「かつてはサウスウッドの生活の中心にでんと構えていた人間にとって、それは奇妙な気持ちだった。うちに帰って二階の寝室にあがったとき、わたしは自分が水のように透明で、まるで幽霊が帰宅したような気持ちだった」(p.174) と述べている。こうした事実は、彼が銀行の支店長であったという個人的事実が重大なことではなく、銀行がこの町に存在し彼らの生活の助けとなっていることが重大なのである。従って、銀行に勤めている期間、彼は銀行を効率的に機能させる歯車の一つに過ぎないのであって、歯車である間は人々の記憶に残るが、その役目を終えたとき、新しい部品と取り替えられる一消耗品であり、人々の記憶から消え去り、捨て去られる存在なのである。

As it turns out, he has simply been in need of motherly attention all this time. Still, in a bit of necessary transfiguration because Henry is

also a human being, it takes some nine more months after the arrival of the mother for her reluctant offspring to break out completely into the light of day. If Henry seems unusually loath to be born, it's because he is quite certain he is happy in the obscurity of his little world. Since he cannot see the brilliant world outside his prison, he is content to remain in the dark security of his ignorance.⁷⁾

それでも、もしヘンリーがオーガスタ叔母の世界を知ることがなかったら、この世界を象徴するキーン嬢の求愛にも近い南アフリカのコーヒーフォンティンからの手紙に応じて結婚し、チャージ少佐のようにのんびりと満足してサウスウッドで余生を送っていたことだろう。

動の世界

キーン嬢の世界が「静」を象徴するのであれば、オーガスタ叔母の世界は「動」を象徴していると言えるだろう。それをもっともよく表しているのが、彼女の旅行好きということだろう。旅行とは、日常生活の場を離れ、訪れたことのない場所で見ただけの風景や事物に接し見聞を広め、その土地特有の食べ物を味わい、日常では経験できない新しい経験をすることがその大きな目的であり楽しみでもある。旅行には常に未知なる物への憧れと期待と不安が付きまとい、それが刺激となって旅する時間を充実したものにしていくと考えられる。即ち、旅行と日常性とは相反する特性を有するもので、オーガスタ叔母やジョー伯父が旅行することに異常な関心を見せるのは生活への変化、波瀾に満ちた充実した時を求めるからである。それは同じ時間でも叔母に言わせれば、同じ時間を何倍にも有効に使っていることになる。

叔母の世界は、次に何が起こるか予測不能の世界である。そこには安定や平安といったものではなく、予測を超えた突発的な事柄が次々と起こるのである。しかし、不思議な魅力があって、規則正しい時の流れを忘れさせる刺激的な要素が多分に感じ取られる。叔母の世界は、年齢を意識させないだけでなく、時間を感じさせる予測可能な物事の継続的な流れが無く、ステンドグラスのようにいろいろな色でできた彼女の過去の出来事に新たな色合いの出来事が付加されていくような不思議な魅力を持つ世界である。

彼女の人生は、彼女の部屋の数多くのヴェニスガラス細工のように煌びやかに輝いている。例えば、彼女の男性遍歴を見ても、まずヘンリーの父親との恋、次にブライトンと一緒に犬の教会を設立して仕事をしていたカラン、そしてヴェニスではナチスの美術品の密売のような怪しげな仕事をしていたヴィスコンティといった男達との生活、パリでは情婦として同棲していたムッシュー・ダムブルーズとの生活、そしてヘンリーが初めて会ったとき以来のワーズワースとの同棲、ワーズワースを棄てた後はアルゼンチンからの密造

酒をバラグアイに運び込む密輸の仕事をしている戦争犯罪人である過去の恋人ヴィスコンティとの結婚生活の再開。更にその生活の場もイギリス、イタリア、フランス、バラグアイなどであり、その間、旅行した都市は数知れずといった様子である。

旅行は、一カ所の町で生活する牢獄のような人生とは違って、荒野で自由に生きている野生動物の危険ではあるが変化に満ちた人生を象徴する。牢獄の中での倫理観などは所詮檻の中での秩序を維持するために人為的に造られた掟に過ぎない。檻の外では、生存競争に生き残るには知恵を働かせて敵を出し抜かなくてはならない。生きていくためには人を裏切ることも人に裏切られることもあり得ることなのである。例えば、オーガスタ叔母はヴィスコンティの怪しげな計画に乗ってジョー伯父より相続したほとんどの金を無くしてしまった。ヴィスコンティという男には「叔母もそうだし、自分の妻もそうだし、枢密卿も王子たちも、いや、ゲシュタポさえ裏切られたのだから」(p255) その後、ヴィスコンティは姿を晦まし、叔母は怪しげな商売をしていたようだが、その後何年かしてミラノでヴィスコンティに出会った話しを聴いて、ヘンリーが叔母にヴィスコンティを軽蔑しているだろうと聞いたとき、叔母は次のように言う。

「わたしは誰も軽蔑なんかしていませんよ……誰も。あんたがそんなに自分に対するあわれみに耽りたけりゃ、自分の行いを後悔しなさい……でも絶対に人をばかにしたりしちゃいけない。あんたの考え方が人情にかなってるとなんて思いあがっちゃだめよ。メサゲロの裏の建物でわたしが何をしてたと思ってるの？いんちきをやってたんじゃありませんか。だったらヴィスコンティがわたしをだましたって仕方ないでしょう？でもあんたはたぶんあのちっぽけな田舎の銀行員生活じゃ一度もだましたことなんかないでしょうよ。……だけどそれはあんたがそれほどほしいと思うものがなんにもなかったからよ……お金だって、女だってもですよ。あんたはよその人の子供の世話をするばあやみたいに、人のお金の面倒をみてたんだからね。檻の中で、ちっちゃな五ポンド紙幣を飽きもせず積みあげちゃ、その持ち主たちに手渡してやってるあんたの姿が目に見えるようですよ。たしかにアンジェリカはあんたを自分の思いどおりに育てあげたわね。かわいそうにあんたのお父さんなんか何もする隙なんかなかった。彼もベテン師だったけど、わたしはあんたもすこしはそれを見習いやよかったですよ。そうすりゃわたしたちだってすこしは話が通じるだろうけどね」 p.117

そして「ヴィスコンティは身の保証なんか気にしたことは一度もありませんよ」(p.259) と言う言葉には命を賭けて生きている人間に対する限りない愛情を覚えているように感じ

られるのである。そして品行方正なヘンリーに向かって、「正当な盗みのすこしくらいは……特にそれが金に絡んだ場合……誰に損害を与えるってわけじゃなし。金は自由に流通させるべきものですもの。……職業的なセックスだってすこしはわたしも賛成なんだから」(p.72)と平然と言っているのを見て、スーツケース一杯の大金をイギリスから不法に運び出したり、蠟燭の形にした金塊を持ち出したりするオーガスタ叔母の大胆不敵さにはヘンリーの檻の中での安定した生活をあざ笑うような人生の修羅場をくぐり抜けてきた生きる事への執念が窺える。彼女にとって生きているその一瞬一瞬が問題であって、人生は物理的な時間によって計られるのではない。彼女は「わたしは生き甲斐のない生活をして死んでいくなんていやだからね」(p.255)と言う。その言葉には明らかに平凡な生き方に対する軽蔑が込められている。従って75歳になってもワーズワースとの愛人関係、その後のヴィスコンティとの結婚から判断すると、彼女は世間の一般的な既成概念などまったく眼中にない人物であることがわかる。その姿には *The Comedians* で見た情夫マルセルとの激しい恋に生きたブラウンの母親を思い起こさせるものがある。

彼女は常に檻の外の世界、つまり危険の中に身を置き、一瞬一瞬を生き抜いてきたのだ。そしてその時々々の充実感を楽しんでいるのである。彼女は「……何処へいっても人生が面白いと思うのはわたし一人しか残ってないんだって気がしてね」(p.90)とも言い、自分の経験から「長い一生ってのは年月の問題でね。思い出のない人間は百歳になっても自分の人生がすいぶん短い一生だったなあって思うかもしれない」(p.57)と言う。

静から動へ

ヘンリーが親しくお付き合いをしていた銀行当時の得意先であるヘンリー卿が亡くなり、父を亡くしたキーン嬢がアフリカに旅立つ前にヘンリーに遺産を整理する手助けを頼み、そのお礼に晚餐に彼を招待したとき、彼は「彼女がサウスウッドにこのままいてくれるといいのに」(p.28)と言ったのである。「もしその時わたしが結婚のことを口にしていたら、彼女は承諾しただろうか？……その可能性は充分あった。年齢も似合いだった——彼女は四十に手が届こうとしていたし、わたしは間もなく五十代の半ばになろうとしていたのだから。……あの時もし申し込んでいたら、何もかもどれほど変わっていたかもしれない」(p.27)事実、彼女は「『わたしをここに引きとめるものが何かあれば……』」(p.28)と彼に決断を迫るとも受け取れる言葉を口にしてしているのである。もし彼がそうしていれば、今まで通りのサウスウッドの生活が続いていたことだろう。

しかし、人は誰でも平和な安定した生活を好ましいとしながらも、心の奥底のどこかでヒロイックに生きたいと願っているものと考えられる。オーガスタ叔母と出会うまでヘンリーは「不測の事故だろうと偶然の出会いだろうと、わたしは思いがけないことがいっさいきらいだった。が、叔母と一緒にいるうちにそれにもだんだん慣らされてきた」(p.96)

そしてその決定的なものがヘンリーの出生に関する秘密である。「わたしはあんたの正

式のお母さんは聖女だったって言ったんですよ。相手の女の人はね……あんたのお父さんと結婚するのはいやだと言ったんです……そこでわたしの姉が彼と結婚してその女の穴埋めをしてやったんですよ」(p.13)と堅物のヘンリーの過去に彼が考えもしなかった不道徳なことがあったことを暴露したのである。

わたしは義母が不道徳な行為——悪行と呼んだことの結果として生まれたのだ。わたしの一生は不道徳な自由の中ではじまったことになる。しかしそれにしてもなぜこのわたしが、獄舎につながれなければならないのだろうか？ わたしの本当の母はどこかの獄舎にもつながれたこともないに違いない。……もうあなたがわたしに対して抱いている人間とは、まるきりちがうのだから…… p.216

とは言うものの彼の生き方とは極端に違う叔母の生き方を素直に受け入れるには時間がかかるようだ。彼は父の死を看取った女性に対する叔母の冷たい攻撃的な態度と、叔母がチャールズ・ポティファーの話をしてやるというのを断って叔母をフランスに残して英国に帰ったのち、「もうわたしはグリアに対する興味もなくなっていた。雑草が生いしげっても、伸び放題になってもかまわないという気になった」(p.174)と述べ、「わたしはこの航海(パリからシェルブールへ行った)に叔母と一緒にに行けなかったことに激しいうらやましさを感じた」(p.191)と自分の心境を分析している。

そして彼は、叔母の話しの面白さ、活気に満ちた魅力は、平凡さではなくその逆の要素によって彩られているからなのだとすることに気づく。その典型は、叔母の恋人であったヴィスコンティが美術関係でドイツ軍当局の顧問をしていたとき、彼はドイツ軍に密告せずにおいてやるからと言って、あちこちの侯爵から金をまきあげたことであろう。つまりガストンが言うように“*Intrigue, surprise, paradox, and nonsense are desirable in life because they provide an extra dimension of interest.*”⁸⁾とりわけ叔母がパリにいた頃、付き合っていたダムブルーズという五十歳をかなり過ぎた男が、ヘンリーよりも年上なのに奥さん以外に二人の女性を囲っていた話しは、ヘンリーには大きな衝撃であった。叔母の世界の人間は誰もが愛国心や道徳観といった固定観念に縛られることなく、年齢や国籍、性別を超えて自由奔放に生きているのである。叔母は人間社会が作り出した作為的な観念を軽蔑し、「*真実なんかどうだっていいじゃないか？ どんな人間だっていったん死んで、そのあとすこしでも追憶の中に生きつづけていれば、どうせ尾鰭のついた物語になるものだ*」(p.65)と言う。実際、オーガスタ叔母の記憶に残る人々は幾分尾鰭がついているのだろうが、何という強烈な印象を聞く者に残していることだろう。

その典型的な人物が、ジョー伯父であろう。馬券の予想屋から一財産を作った後、余生を世界旅行をして過ごそうと考えて、出発したとたん、脳溢血で倒れたが、夢を実現する

ために、馬鹿でかい廃屋を購入し、各階の多くの部屋を多くの国々の名所に見立てて、毎週部屋を換えながら世界旅行の気分を味わっていた。そして最後は部屋から部屋へ這い進みながら移動中に息絶えた。彼は安静にしていれば、もう少し長く生きられたかもしれない。しかし彼にとってはベッドに臥して命を僅かに永らえるよりは、危険であっても仮想の世界旅行を続けることのほうが豊かな人生なのである。なぜなら他の人の目からすれば、彼は単に廃屋の部屋から部屋に移動しているに過ぎないが、彼の意識の中では間違いなく世界旅行を楽しんでいるのであって、それが彼にとっては真実であり、重要な事柄なのである。オーガスタ叔母が言うように具体的な事実よりその人間にとっての真実のほうが遥かに重要なのである。

叔母との親交から新しい世界を垣間見たヘンリーはそれまでとは違った目でサウスウッドでの生活を見るようになっていく。すなわち、ヘンリーは銀行を表現するのに、詩人、ワーズワースのオード(頌歌)から獄舎という言葉を用いている。獄舎とは何も変わったことが起こらない安全な世界なのである。毎日が変わることなく、淡々と時間だけが空しく過ぎていく記憶に残らない夢幻のような世界なのである。人はこの世界を平和で穏やかな世界というかもしれないが、見方によっては、ただ死が訪れるのを根気強く待つだけの生活といえる。言うならば、囚人の目には見えない鉄格子に取り囲まれた監獄の中で過ごしているような何の変化もない単調な毎日であり、それはサウスウッド監獄と呼んでもおかしくない。

第二部第一章は、叔母の世界とキーン嬢の世界がヘンリーを獲得するためにぶつかった瞬間といえるだろう。しかしその決着はあまりにも呆気ないものであった。キーン嬢は南アフリカで他の男性から求婚されている現状をヘンリーに打ち明け、彼の助言を求める手紙を送っているが、その手紙と同じ頃、もし叔母の事務的な手紙を受け取っていないならば、ヘンリーは彼が自ら認めているようにキーン嬢に結婚の申し込みをする電報を打ったことだろう。しかし彼は、「ブエノス・アイレスの叔母のところへ行く。あと文」(p.199)という電報を打って、叔母の後を追ったことはすでに彼の心の中では、新しい人生の門出を迎えていたということだろう。ギャストンはこのヘンリーの人生への姿勢の変化を“Greene sets him out alone on this longest of his journeys. Moreover, by employing a two-part structure in the novel, Greene emphasizes that Henry is finally breaking out of his protective shell.”⁹⁾と説明している。

叔母の世界を知ったヘンリーはキーン嬢当ての手紙にサウスウッドのことを「ここで未来はわたしにとってもう楽しいものではなくなりそうです……それはメニューにのった食べもののようなもので、ただ食欲を失わせることにしか役立ちません」(p.175)と書き綴っている。そしてその頃の気持ちを「わたしは生きていることが妙にうれしくて、とっさに自分はチャージ少佐に再会したいとは思いません、ダリアも、からの骨壺も、玄関の入口におかれたオモイの包みも、キーン嬢からきた手紙も、もう二度と見ないことにしよ

うと決心した」(p.278)と述べ、「まるでひろびろとした牢獄から逃げ出したような気持ちだった——いや、縄梯子をつかい、車が待機していて牢獄から脱走させられ、叔母の世界へ——見当もつかない性質の、そしてどんなことが起こるか分からない世界へ——連れてこられたような気持ちだった」(p.214)とも、そして「わたしは仕合わせだったけど、ずいぶん前からもううんざりしてたんだなあ」(p.272)と感じている。彼は自分の人生と叔母の人生と比較すれば、彼の人生があまりにも何もない人生、虚ろな内容の乏しい人生と実感せざるを得ないのである。

オーガスタ叔母の考えるところでは、平穏な生活では、「『あんたが考えるのは、一日一日自分が死に近づいているってことよ。死は寝室の壁と同じくらい近くにきて立ってるんだから……』」(p.238)と言うことになる。つまり、何の変化もない生活では、死が刻一刻と近づいてくるだけで、我々はそれを何もすることなく待っているだけなのだ。それは死刑囚が監獄の中で死刑執行の日を待っているのと何ら変わりはない。でも次の瞬間に何が起こるか判らない生活では、「『どんな突き当たりの壁だって、一日一日とじりじり近づいてくることはないんですよ。壁はあんたが放つといたって自分であんたを見つけるだろうけど、あんたの生きていく一日一日が、あんたには戦に勝ったように思えるのよ。夜になるとあんたは言うでしょう……「あの時おれはそのてにのらなかったんだ」てね……』」(p.239) 一度として死の恐怖に襲われたことのない人間はあたかも死は自分の行く未来に待ち受けているものではないというような顔でその一生を暮らす。そのような人間は無垢と言えるほどの視野の狭さで我々を驚かすのである。人間が絶対に回避することのできない死の恐怖は、人間の精神に最も優れた、最も力強い感動を生み出す根源となるのである。

つまり、波乱に富んだ人生では、英知を絞って生き抜き続けることが大切であって、一日を生き残って明日を迎えられることが喜びと充実感をもって心を満たすとき、人は本当に生きている喜びを満喫するものなのである。生きるとは生きる喜びを満喫することに他ならない。そのためには人間を破滅に導くあらゆる要因の中で生きることを選ばなくてはならない。ヴィスコンティは、「警察署長がわしのことを鼠だと言ったにしても、わしは別に反対しはせん。実際わしは鼠に対してなんだか兄弟みたいな気がするんじゃ。世界の将来は鼠にかかるとる。神は……すくなくともわしはそう思うんだが……自分のつくった原型のうちのいくつかがだめになった時のことを考えて、逃げ道になるものをうんとつくつといた……つまり、それが進化というもんだ」(p.261)と言う。そうしたヴィスコンティの生き方に対してガストンは 'He (*Visconti*) believes insecurity to be a "blessed state" (*TWMA*, p.227) What is so admirable about a rat is that, living in a constant state of insecurity, he is forever challenged to prove he is the best rat.'¹⁰⁾ と述べている。だから檻の中のライオンよりも外敵に常に狙われ死の危険にさらされていようとも自由に生きる鼠のほうが豊かな人生を送れるというのである。つまり、ヴィスコン

ティにとっては、道徳や倫理観などは虚妄の世界観を創るものであり、真理の源ではなく、迷妄や錯覚の源なのである。ヴィスコンティがパラグアイで生きることを選んだのは、先進西洋諸国では考えられないが、パラグアイとは保守党の色である赤いハンカチでたまたま鼻をかんだために保守党の支持者たちに袋だたきにあつて十年の刑に処せられても不思議ではない予測不能は土地柄であり、昔のことを思い出して笑ったばかりに警察署で平手打ちを食わされるような不条理な世界なのである。そんな世界では生きることは危険そのものであるが、同時に密輸などの不法行為は日常茶飯事で、一攫千金を手に入れるチャンスに満ちた土地でもあるのだ。ヴィスコンティは辱められ、打ちのめされ、戦犯として追われる恐怖を覚えながらも予測不能な自分の未来を見詰めて懸命に生きようと努力しているのである。そんな世界では油断なく狡猾に立ち回る才能を備えた者だけが生き抜き、大金を手にする事ができるのだ。

おわりに

ヘンリー、ヘンリーの義母であるアンジェリカ、キーン嬢、チャージ少佐そしてサウスウッドに代表される生活が静の生活、すなわち、何の変化もなく同じ生活が毎日繰り返されて時間だけが経過していく生活、振り返ってみても何も記憶に残らないような平平凡凡たる生活、生きている喜びや悲しみ、体が震えるような感動や心の奥底からわき上がる憎悪を強烈に体験することなく死が訪れるまでただじっと待っている無為な生活であるとするならば、それに対峙するオーガスタ叔母、ヘンリーの父の兄であるジョー伯父、パリから少し離れた街に奥さんと子供がおり、パリの二つのホテルの部屋に二人の女性を囲っているダムブルーズの逞しさ、いろいろな地方を巡回興行しているカラン、イタリア、フランスなどを逃げ回っているヴィスコンティ、イスタンブールへの汽車の中で出会ったトーリー嬢などオーガスタ叔母に関係する人たちは、不道德な生活、ナチスがヨーロッパで収集した美術品や財宝の横流し、禁制品の密輸、不法な金品の国内外への持出し、持込、薬物の使用など数え挙げれば切りがないほど様々なことを行っている。ことの良し悪しは別にして、確かに彼らは時と場合によっては命がけで、自らの目的遂行のために臨機応変、縦横無尽に力の限り行動している。変化のない安定した人生は安全であるかもしれないが、生きているという強烈な意識は自分自身にもまた他人にも薄いのである。逆に常に何が起こるか予測のつかない人生との格闘は人生に活力を与え、本人に生きている事実を強烈に意識させる。その生命感こそ生きていく上での重要な要素なのである。その人生は波瀾万丈であり、彼らの人生は変化に富んだ出来事と貴重な経験と悲喜こもごもの思い出に彩られていると言えるだろう。それらは彼らの人生を彩り豊かなものにしていくはずだ。

グリーン自身も、オーガスタ叔母と同じく大学を出て以来、ほとんど毎年のように取材旅行も含めて世界各国へ出かけている。彼はベトナムやハバナ、パラグアイやシエラ・レオーネなどで圧政や過酷な運命に苦しみながらも逞しく生きる人々の姿を描き続けてき

た。グリーンの小説の主人公達は武器を取って戦うのではないが、決して時勢に流されることなく、自らの運命に諦めることなく茨の道を歩みつづけるのである。そのような世界に生きる人々にとっては、人は国家や道徳という観念によって形成された世界の中で生きているものでもなく、また人と世界は一体化しているものでもなく、それぞれそれ自体として存在しているに過ぎないのである。国家観、道徳観、倫理観などに裏打ちされた世界観は支配する側が支配される側の人々を目に見えぬ檻に入れて抵抗を奪い、おとなしく生かしておくための罫なのである。だから人間は与えられたものを規範とするのではなく、自分の体験によって自分の世界観を作り、それを頼りに生きなくてはならないのである。そのためには過去に創り出された世界の掟の庇護を放棄して一寸先の闇に向かって進む勇気を必要とするのである。グリーンがそうした人々に熱い共感を覚えているのはそれが彼の人生に対する姿勢と同じであるからだと言えるだろう。

Notes

- 1) Greene, Graham. *Travels with my Aunt*. London: William Heinemann & The Bodley Head, 1980
- 2) グリーン, グラハム, 高見幸郎訳『逃走の方法』(東京: 早川書房, 昭和60年) p. 265
- 3) グリーン, グラハム, 小倉多加志訳『叔母との旅』(東京: 早川書房, 昭和56年) p. 44
以後本文中の引用は頁数のみ表記する。
- 4) Miller, R.E. *Understanding Graham Greene*. Columbia: University of South Carolina, 1990. p. 129
(Henry), (Miss. Keene) は筆者挿入
- 5) Gaston, Georg M., A. *The Pursuit of Salvation: A Critical guide to the Novels of Graham Greene*. New York: the Whitston Publishing Company, 1984, p. 104
- 6) DeVitis, A.A. *Graham Greene*. Boston, Massachusetts: Twayne Publishers, 1986, p. 50
- 7) Gaston, Georg M., A. p. 103
- 8) Ibid., p. 104
- 9) Ibid., p. 113
- 10) Ibid., p. 115 (*Visconti*) は筆者挿入

On Travels with my Aunt
—Peace and Insecurity—

Toshihiko UEKI

College of Life Science

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 4, 2006)

In *Travels with My Aunt*, the worlds Henry lives in are classified in two. One is the gentle, tranquil, traditional but rather dull world symbolized by Miss Keene and Southwood where he lives with his mother-in-law and works as a bank clerk until retirement. The other is the eventful, commotional, treacherous but exciting world symbolized by Aunt Augusta and many people who had some relations with her.

In this paper we want to analyze the process Henry had been fascinated little by little by the world of Aunt Augusta in a long friction between the two worlds, and make clear what fascinated Henry.